

# 歴史的建物と周辺環境のリニューアルで 大学のシンボルとなる空間を整備

大阪大学 大学会館(旧イ号館), 学生交流棟北側広場, 中山池周辺整備



広場見下ろし全景



周辺配置図

## ◆◆◆整備の目的・方向性◆◆◆

- 登録有形文化財のリニューアルを行い、大学のシンボルを形成
- 大学のモットー「地域に生き世界に伸びる」のもとで、社学連携、産学連携、国際連携の活動拠点として各連携事業を推進
- 環境に優しい建物として、省エネルギー化・低炭素化を推進
- 大学の資産であると同時に地域の貴重な自然でもある緑や池等の環境を生かしながら地域に開き、学生のキャンパスライフを豊かにするシンボリックな空間を創出



## ■計画設計のポイント

大阪大学が平成23年に創立80周年を迎えるに当たり、「原点へ・未来へ」をテーマに実施された様々な記念事業の一環として、大学の「原点」の一つである旧制浪速高等学校の校舎（登録有形文化財）を「大阪大学会館」として再開発した。

建物周辺は豊中キャンパスにおいて最も活気のある一帯であり、人が入り、集い、憩えるスペースの創造のために、周辺のプロムナード等を整備し、大阪大学会館と併せて豊中キャンパスのシンボリック空間を形成している。

## 歴史的様式の保存

アール・デコの時代に建てられた有形登録文化財である旧イ



講堂



貴賓室



階段室

号館において、講堂・エントランス・廊下のモールドディング等の保存・修復・復旧等、既存意匠の再現による歴史的様式の保存をしながら、豊中キャンパス全体のシンボルとなるよう改修整備を行った。

## エコ改修

耐震及び老朽改修に合わせて、文化財としての外観の保護に配慮しつつ、建物の断熱化、LED照明をはじめとする省エネ

機器への更新、新エネルギーの取組として太陽光発電パネルを設置するなど、省エネルギー化・低炭素化を図る対策を学内専門家のコンサルティングにより行った。

## 屋外空間の再編

大阪大学会館（旧イ号館）周辺は、登録有形文化財である大阪大学会館、総合図書館、全学教育施設、風格を感じさせる庭園や大木等が多く存在するキャンパスの重要な東西空間軸と、学生の集う学生交流棟や中山池との交差点に位置し、「大阪大学の歴史が積み重ねられている場」である。

今回の空間再編計画では、大学の資産であると同時に地域の貴重な自然でもある緑や池等の環境を生かしながら地域に開き、学生のキャンパスライフを豊かにするシンボリックな空間の創出を目指し、現況樹木の豊かな緑や中山池への親水空間を生かし結びつけるために新たな空間秩序の導入を行うことで、学生や地域住民が集うキャンパスの中心的な広場として整備を行った。



パーゴラ



親水デッキの照明



中山池+阪大坂結節点



中山池堤防修景

## ■ 整備戦略

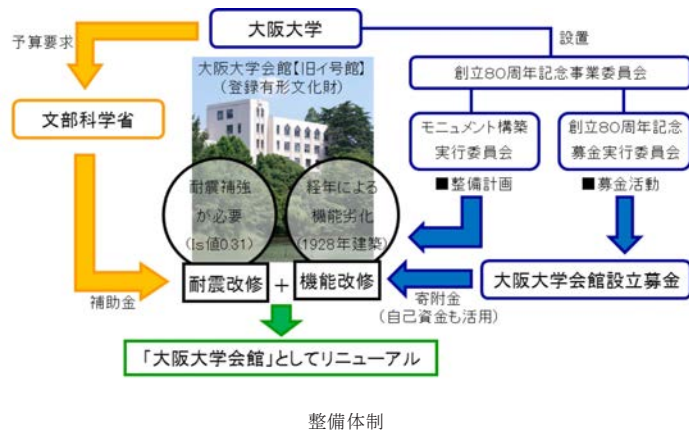
### 施設実現のための体制整備

総長を委員長とする創立80周年記念事業委員会にて、本事業の実施を決定した。

事業を円滑に進めるため、実行組織を構築した。募金活動を円滑に進めるため、趣意書や整備イメージ（パンフレット）を作成した。

### 外部資金の獲得

地域住民や大学構成員や行政等でワークショップを開催し、



議論を重ねながら、中山池の堤体整備や周辺に周回散策道等の整備を、大阪府中心で行っていただいた。農林水産省等からの外部資金（約7,200万円）を得ることができた。

### キャンパスマスタープランでの位置づけ

旧イ号館周辺は、「新しい学生交流棟とセットでシンボル空間を創造」「中山池親水広場として整備する」「図書館方向、中山池方向への見通しの良い空間にする」との整備方針が示されていた。

キャンパスマスタープラン（平成24年4月部分改訂版）においては、大阪大学会館は「現況の最も強いランドマーク」であり、「80周年記念整備事業の完成により、賑（にぎ）わい空間との相乗効果と強いシンボル性を獲得した」とされている。

## ■ 利用の促進

### 維持管理・運営方法

- ・ 寄附金等にて施設の維持管理を実施
- ・ 専属のスタッフが常駐し管理を実施

## ■ 施設整備の効果

### 満足度

キャンパスイメージアンケートにおける、屋外空間改修の効果についての満足度

学生交流棟北側広場

- ・ 「居心地の良さ」に対する満足度：67%（回答数265）
- ・ 「美しさ」に対する満足度：69%（回答数268）

### CO2削減

数値シミュレーションによる予測結果では省エネルギーの対策で3割のエネルギー需要が削減されるとともに、太陽光発電でおおよそ5割のエネルギーが自給され、空調を使用しない中間期の日中においては、全ての電力を補えるノーカーボンの施設となり、無対策ケースと比べて約7割のCO2排出削減となっている。

## ■ 補足

整備年度：平成22年度～平成23年度

中山池と学生交流棟北側広場等は、大学関係者・地域住民に開かれたスペースと緑の景観を形成する点が高く評価され、「第7回豊中市都市デザイン賞」を受賞した。



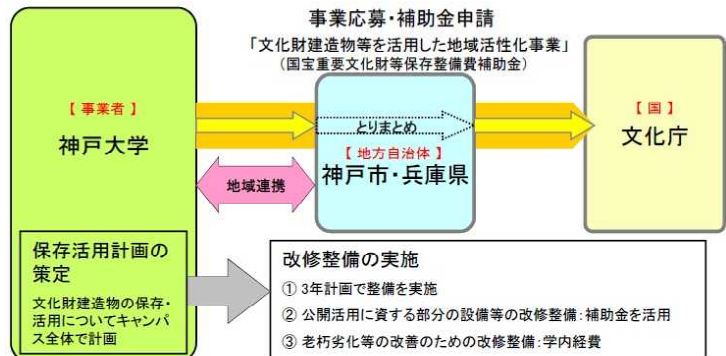
# 歴史的建造物群を保存しつつ 一般市民に公開

## 神戸大学 登録有形文化財等改修整備



神戸大学登録有形文化財（平成25年度）

- ①兼松記念館 ②出光佐三記念六甲台講堂 ③社会科学系図書館  
④六甲台本館 ⑤武道場



事業応募・補助金申請の関係

### ◆◆◆整備の目的・方向性◆◆◆

- 自治体の観光振興・地域活性化事業の一端を担い、観光振興・地域活性化を推進する
- 大学の魅力を地域社会へ発信する

#### ■計画設計のポイント

##### 歴史的建造物群の活用

大学キャンパスの貴重な資源となる登録有形文化財建造物を一般公開するために、文化庁の補助事業である「歴史的建造物公開活用事業」を利用し、建造物の保存・修復、公開活用にあずかる部分の設備及び公開活用の安全性確保に必要な防災設備等の整備を行った。補助は神戸市と兵庫県がとりまとめるため、自治体と十分連携し、申請した。

大学キャンパス及び歴史的建造物は、大学のみならず、地域にとっても貴重な資源であるため、その価値や公共性を生かし、双方に有益となる公開・活用方法について、自治体と十分話し合い計画した。

##### 保存活用計画の策定

文化庁補助事業の応募に当たっては、「保存活用計画」をキャンパス全体で策定し、学内関係者の合意形成を図った。対象建物は、いずれの建物も老朽化が進行しているため、貴重な部位について保存・修復を図るとともに、建物を公開活用する上で求められる機能として、安全・快適な移動を実現するためのバリアフリー化や、歴史価値の認識・継承にあずかる案内表示（サイン）等を視野に入れた整備計画とした。また、公開プログラムの会場やルート設定を含め、対象建物以外の既存施設も公開施設・便益施設として位置付け、来訪者がキャンパス全体を楽しめるような計画とした。

##### 文化財建物に適した保存改修方法の選定

歴史的建造物の改修は、一般建物と異なり、歴史的価値の評価や保存に適した改修方法が求められる。神戸大学では、建築史分野の有識者である教員の協力を得て、各文化財建物に適した保存改修方法を現地にて打合せしながら実施設計・現場監理を行った。

#### ■整備戦略

##### 伝統と緑と人の共生

神戸大学キャンパスマスタープラン2015においては、基本方針「伝統と緑と人の共生」に基づき、地域社会やグローバル社会に開かれたキャンパス形成、大学を象徴するキャンパスリソ

ースの保存活用がテーマとして掲げられている。これに沿った整備を進めるべく、豊かな景観、環境資源を背景に、大学が発信する公開プログラムを実施する場として地域公開施設等を充実させるとともに、周辺地域の自治体との連携を推進し、地域社会の参加を活発化させることで研究領域の拡大や実験成果の充実、地域観光振興、地域活性化を図ることとしている。



出光佐三記念六甲台講堂

##### 学内経費の確保

文化庁の補助事業は、対象建物が重要文化財等として指定（登録）されている建物のみである。また、補助金の補助率は基本的に50%であり、他の補助金は申請できないため、申請段階で学内経費の確保を行った。

#### ■利用の促進

##### 自治体と連携したイベント等の実施

自治体と連携し、各種公開講座などのイベント及びプログラムの会場として一般公開をすすめ、文化財建造物を含む豊かな歴史資源をもつ六甲台キャンパスに触れていただくことで、その存在価値を広くアピールしている。

#### ■施設整備の効果

##### 市民認知の向上

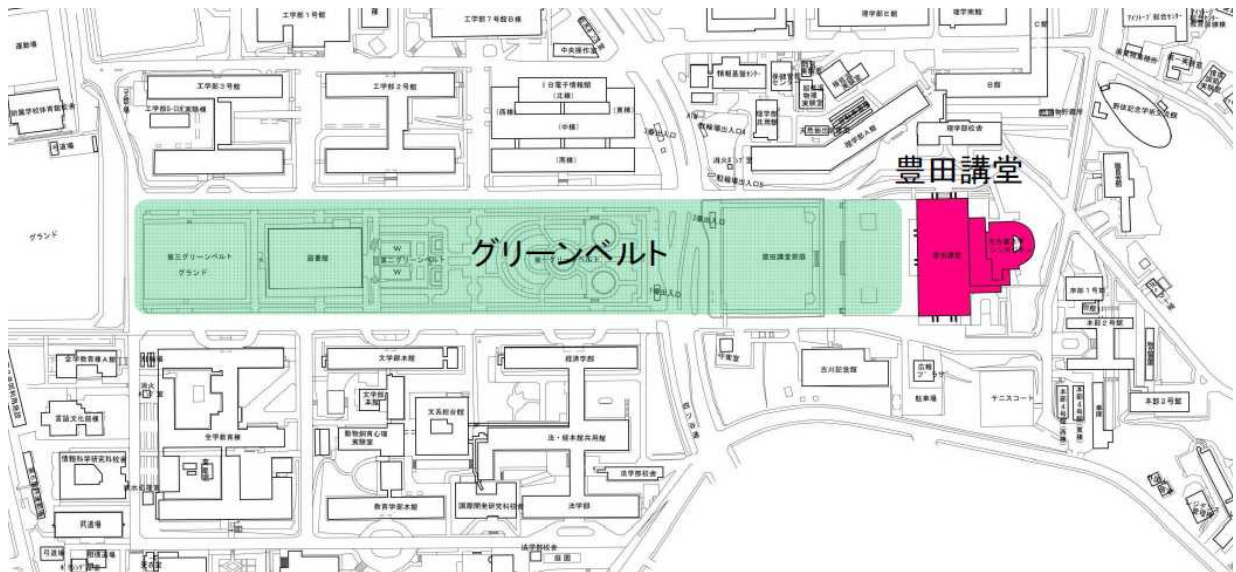
建物の公開・活用を促進する上で重要な安全対策とともに、経年により損なわれた文化的価値の修復と歴史的景観の復元を行った。整備後、神戸市との共催で開催した見学会「近代建築探訪」には一般市民が多数参加し、その後も大学内の文化財建造物の認知は広がっている。

#### ■補足

整備年度：平成23年度～平成25年度

# 近代建築の保存・改修により 大学の歴史と伝統を継承する

名古屋大学 豊田講堂増築・改修整備



豊田講堂配置図

## ◆◆◆整備の目的・方向性◆◆◆

- 大学キャンパスの骨格を形成
- 大学のシンボルであるとともに、文化遺産としてのモダニズム建築の継承
- 機能性・快適性・安全性・耐久性・フレキシビリティの向上

## ■計画設計のポイント

### 建物の持つシンボル性

豊田講堂は、1960年（昭和35年）にトヨタ自動車工業株式会社（現トヨタ自動車株式会社）から、教育の振興、科学の発展の一助となることを目的に建設寄附された建物であり、名古屋大学のシンボルとして広く親しまれている。この講堂は、建築家として著名な槇文彦氏の設計による初期の代表作であり、日本を代表するモダニズム建築のひとつとして、高く評価されており、大きく様変わりした名古屋大学を含めた東山地区周辺の中であって、名古屋大学の骨格として造られたグリーンベルトの東端にモニュメンタルに鎮座するその姿は堂々とし威厳を感じさせるものである。

豊田講堂の基本主旨として、「将来予想される学園の軸としてつらぬく120mの並木道路の末端に位置するところに大きな石の広場を設け、それにまたがる仁王門のような建物が前方の茫漠（ぼうばく）たる空間と対し、そこで一応区切りがつけられる。さらに、階段と高いピロティを通して後方の東山丘陵のもつ静かな雰囲気へと空間が導かれていく。」とされている。また、「明確な正門が存在しない」名古屋大学東山キャンパスにおいて、豊田講堂の列柱と大屋根からなる巨大なコンクリート打放しの架構は、グリーンベルトが形成する軸を受けとめる「門としての建物」という意味が込められている。

グリーンベルトの幅一杯に建てられている豊田講堂は、細い偏平列柱と建物外周に設けられたコ型・H型の平面形をした耐震壁によって支えられている。地震力に対処する構造壁をバットレス（控え壁）として建物外部に放り出すことにより、垂直荷重を支持する列柱は思い切り細くなっている。構造計画を工夫することによって成し得た列柱の細さは、鉄筋コンクリート



による巨大な架構を軽快なものにしている。

この巨大な架構の中には、講堂、会議室等の機能に応じた諸空間が収められ、建物両翼に設けた広いピロティによる学生活動等のサポート機能など、名古屋大学の中心建築としての多目的な機能を配し、その外観は構造体と材料感を力強く表現する計画となっている。

また、豊田講堂の120mに及ぶ広い前庭には80m角の床石広場による学生のための「野外演壇」機能を設け、更なるその空間は大階段を介して建物両翼のピロティに接続し、建物内部を経て後方の東山丘陵のもつ静かな雰囲気へと空間が続いていく計画となっており、前庭の動的空間と後方の静的空間を建物両翼のピロティが連続的に接続することにより、槇氏の「奥」という概念を表している。

豊田講堂改修・増築工事では、豊田講堂の「再生」及び「機能強化」と豊田講堂を核とした「機能拡充」を柱とするコンセプトと豊田講堂改修計画（案）の基本方針に基づき、「意匠の

保存継承」と「機能的・快適性・安全性・耐久性・フレキシビリティの向上」を目的とした設計を行っている。

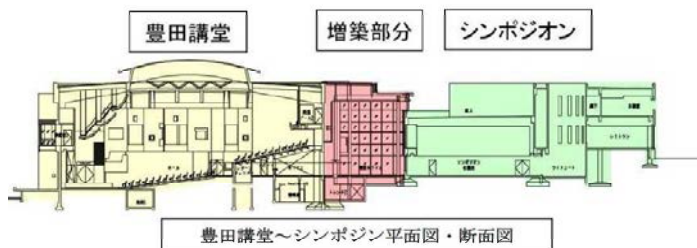
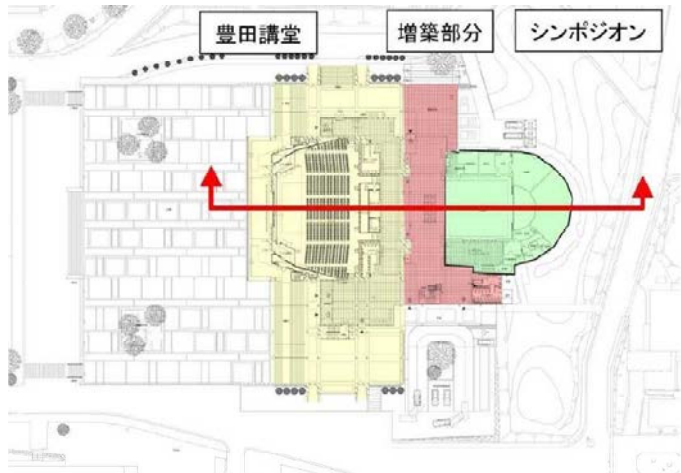
## 意匠の保存継承

○外観（景観）の保存

- ・杉板本実型枠コンクリート打放しの再生
- ・汚れ防止（水切りの設置）
- ・維持管理（吉田工法）

○内観の保存（オリジナルの印象を損なわないデザイン）

- ・ホールの音響照明反射板，会議室の木製サッシュ，天井ルーバー，固定家具の補修
- ・寸法モジュールの踏襲（サッシュ割り等）やディテール検討



豊田講堂～シンポジオン平面図・断面図

## 機能的・快適性・安全性・耐久性・フレキシビリティの向上

- ・学校の講堂として整備し，主用途は式典・講演（コンサートも可）
- ・ホール性能の改善（椅子・音響・空調・電気）
- ・耐震補強，アスベストの除去
- ・機能的の改善とユニバーサルデザイン
- ・シンポジオン（大会議室，レストラン，宿泊）との一体化による多様な活動のサポート



豊田講堂正面（南側）

## ■整備戦略

### 芸術・文化を通じた社会貢献

市民との連携や国際的なインターフェイスを念頭に置いた「芸術・文化を通じた社会貢献の要」としての文化施設を整備



アトリウム北側外観



アトリウム内観

する構想に基づき，創知交流プラザ（仮称）計画推進検討ワーキンググループが基本構想，企画・運営手法や組織などのソフト面まで踏み込んだ検討を重ねることにより，建設後47年が経過した建物本体の老朽化と機能的な劣化が著しい状態となっていた豊田講堂の「再生」及び「機能強化」と豊田講堂を核とした「機能拡充」を柱とするコンセプトを固め，平成17年6月には外観・内観の再生とホール機能の改善並びに豊田講堂とシンポジオンの空間と機能を有機的に結ぶアトリウムの増築を行う豊田講堂改修計画（案）を策定し，2006年～2007年（平成18年～平成19年）に，トヨタ自動車株式会社をはじめとするトヨタグループ10社の寄附により，貴重な近代建築の保存継承を図った。

## ■利用の促進

### 利用規程の整備

学外者による豊田講堂利用の要望が増加したことから，1962年10月に「豊田講堂使用に関する暫定規定」と「豊田講堂使用に関する暫定規定施行細則」が制定され，現在は「名古屋大学豊田講堂等使用に関する規程」と「名古屋大学豊田講堂等使用に関する規程施行細則」にて運用が図られている。

## ■施設整備の効果

### 名大生の記憶に刻まれる建物

豊田講堂は，名大生のキャンパスライフの始点と終点である入学式と卒業式の会場として，深く記憶に刻み込まれる建物であり，学内最大の収容人員能力を持つ建物として，ホームカミングディや名古屋大学フォーラム，名大祭などに利用され，豊田講堂の設計の意図がくみ取られた利用状況となっている。



豊田講堂前庭での名大祭

## ■補足

整備年度：平成18年度～平成19年度

1962（昭和37）年 日本建築学会賞を受賞

1993（平成5）年 名古屋市都市景観重要建築物に指定

2003（平成15）年 DOCOMOMO Japan 日本近代建築100選に選定

2011（平成23）年 第20回BELCA 賞（ベストリフォーム部門）を受賞

2011（平成23）年 登録有形文化財に登録

## 「国立大学等の特色ある施設2013」の編集に当たって

本書は、国立大学等の法人化後整備された、屋外環境の整備を含む特色ある施設（附属病院を除く）の整備について、国立大学等から提供された資料等をもとに、「キャンパスの創造的再生編」として、37事例を紹介しています。

紹介事例は、報告書「キャンパスの創造的再生（～社会に開かれた個性輝く大学キャンパスを目指して）」に示されている次の6つの「キャンパスに求められる基本的機能・役割」によって分類するとともに、同報告書に示されている「キャンパスづくりの留意事項」との関連を表にしました。また、整備の内容が建物の新営なのか改修なのか、あるいは屋外環境の整備なのか等が分かるように、主な整備内容の表も付けています。

- 教育研究活動を支える
- 全人的な人格形成を促す
- 社会に開く
- 個性・特色を表す
- 交流を育む
- 時代を紡ぐ

一つの事例を、見開きの2ページ、又は1ページで紹介することを基本に編集しています。

また、各事例は、施設全体の紹介ではなく施設整備のアイデアや知恵を紹介するという観点から、次に示す項目立てで紹介する構成にしており、さらに、特徴を表す写真や図面等により、分かりやすい構成となるように配慮しました。

### タイトル

施設の特徴や整備のアイデアを簡潔に示す

- 大学等名称・施設名称
- 整備の目的・方向性

施設の整備で期待された教育・研究上の効果、大学の機能強化や個性・特色と施設整備との関連、キャンパスの目指すべき方向性と施設整備との関連等

### 計画のポイント

施設や屋内外の空間の特徴や計画・設計に当たって留意した事柄等

### 整備戦略

施設整備実現のための体制整備、キャンパスマスタープランの充実、学内外関係者・自治体等の参画、予算確保の工夫等の特色ある取り組み、及び、キャンパスマスタープランでの位置づけ等

### 利用の促進

効果的な利用を推進するための運営上の工夫・留意点

### 施設整備の効果

施設の整備で発現している教育・研究上の効果や施設利用者の感想等

### 補足

実施設計・工事期間を示す整備年度、及び基本設計を外注した場合の実施期間  
整備に伴う受賞の内容

より良いキャンパスづくりのためには、教育・研究等の在り方に基づいた施設計画・設計の方向付けが重要であり、「キャンパスの創造的再生」は、その重要な考え方です。本書が、国立大学等の施設整備関係者が施設の整備を計画する際のヒントや、これまでのノウハウの蓄積やデータの共有化の一助になれば幸いです。



